

働く人の健康管理・健康づくり情報誌

へるすあっぷ21

12 2022
DECEMBER
No.458



健康寿命延伸に向けて

特集 日本人の健康課題

わかる!身につく!健康力 なんとかしたい! 冬のかゆみ

最前線レポート 健診結果予測でリテラシー向上と行動変容を支援 <NEC>

けんぼREPORT 治療中患者(被扶養者)の特定健診受診率向上事業



介護リテラシー向上講座

心得 9

認知症の親との会話で
大切なのは真実ではない

今回は認知症になった親との会話について、よくある事例をもとにお話ししましょう。

「ご存じのとおり、認知症では主に短期の記憶が抜け落ちてしまいます。同じことを繰り返したり、間違っただけを言ったりするため、介護をしている側はついイライラしたり、つらくなったり、悲しくなったりすることがあるでしょう。そんなときにどう対処すればよいのかは、誰もが直面する悩みです。

たとえば、認知症で介護施設に入っている母親に面会に行くとします。そのとき、差し入れとしてケーキを「施設スタッフのみなさんの分もありますからどうぞ」と渡したところ、数日後にお母さんから「スタッフの人が『おまんじゅうおいしかった』と言っていたわよ」と電話がありました。娘としては、「あれ？ おまんじゅうじゃないわよ、ケーキよ」と間違いを正したくなりそうです。しかし、実際にあったケースでは、間違いを正されたお母さんは「そうだった。スタッフがみんなで勝手に食べてしまったのだ！」と怒り出してしまった

そうです。おそらく、お母さんは娘の差し入れを覚えていません。でも、娘が持ってきたことを忘れたとは言いたくない。そこで、施設のスタッフが知らないうちに食べてしまったという筋書きになってしまったのでしょうか。

ここで大事ななのは、「娘にとつての真実は何か」よりも、介護の主人公である「お母さんが穏やかであるためには」ということです。ケーキをおまんじゅうと言われ、母親も食べたことを覚えていないとなると残念な気持ちもあるでしょうが、そこにはこだわらずに「スタッフのみなさんに喜んでもらえてよかったわ」と受け流してあげれば、穏やかな母子の会話で終われたかもしれません。

とはいえ、相手は自分の親。いつも冷静に対処できるものではありません。もしつらいと感じるなら、親とのコミュニケーションの量を減らしてみてもよいのではないのでしょうか。お互いが穏やかな気持ちで、よい親子関係を保つことがいちばんの親孝行だからです。

認知症の進行予防の声掛けは
介護のプロに任せる

認知症の親とのコミュニケーションでよくあるのが、子が親の認知症を進行させてはいけないと思いついでいるケースです。リハビリになると思いついて「今日は何月何日？」「昨日何食べた？」という声掛けをしがちですが、認知症はそうした記憶がスパッとなくなります。そこへ矢継ぎ早に質問をされたら、本人にとってはストレスであり、悪化させるおそれもあります。

認知症の本などには、否定せずに、その人が話しやすい話題を続ける、ゆっくりとした口調で話すなど、コミュニケーションに関するアドバイスが書かれているものがあります。それは介護のプロに任せるべき。家族がやる必要はありません。

しかしながら、どこまで親の発言に同調すればよいのか、声掛けをしなくてもよいのか、不安に思うこともあるでしょう。そんなときは、介護のゴールは「介護の主人公である介護される人が穏やかに過ごす」ということを思い出してください。それさえ見失わなければ、自然によりコミュニケーションがとれるようになってくるでしょう。